

## 子規の「配合」論と、その展開

復 本 一 郎

小稿は、正岡子規の「配合」論の実体を明らかにし、それが門人たちにどのように継承され、発展したかを検討することを目的とする。なお、以下の引用文には、読み易さを考慮して、適宜、句読点、振り仮名等を施すこととする。

子規は、明治二十八年（一八九五）十月二十二日より、十二月三十一日まで、二十七回にわたって、新聞「日本」に『俳諧大要』を連載している。そして、子規生前の明治三十二年（一八九九）一月二十日に「ほとゝぎす発行所」より高浜清（虚子）の手によって、単行本として編輯、発行されている。「俳諧叢書」の第一編として出版されたものである（ちなみに第二編は、子規の『俳人蕪村』）。虚子は、その序に左のごとく記している。

子規子、痾を戦地に得、帰つて神戸の病院にあること数旬、転じて須磨に遊び、やゝ癒えて故山に帰り、漱石の家に寄寓す。極堂等、松風会員諸氏、朝暮出入して、俳を談じ、句を闘す。時に明治二十八年秋、俳諧大要は當時に成るものにして、嘗て新聞日本に連載せらる。是れ子規子進歩の徑路を叙したるもの

にして、又同人進歩の徑路を叙したるもの、即ち俳諧の大道なり、今輯めて一卷となし、俳諧叢書第一編に収むる所以なり。

ほとゝぎす発行所にて

明治己亥一月

虚子識

子規は、明治二十八年（一八九五）八月二十四日夜に三津浜（松山市）に着き、十月十八日まで滞在しているが（十月十九日出航）、その間、八月二十七日より十月十七日まで松山市二番町の漱石の下宿先を居としている。虚子によれば、『俳諧大要』は、その折の執筆であるという。和田茂樹氏は、『俳諧大要』を「近代俳句の基点となる体系的俳論集」（『俳文学大辞典』）と評価している。子規初期の俳句観の集大成といえるものであろう。

その『俳諧大要』を繙くと、「配合」論とのかかわりにおいて、まず、左の一条が注目される。「第六 修学第二期」の項の中に見えるもので、明治二十八年（一八九五）十二月十日に掲載されたものである（第二十二回）。

課題を得て空想上より俳句を得んとする時に、其課

題若し難題なれば、作者は苦吟の余、見るに堪へざる拙句を為すこと、老練の人と雖も、往々免れざる所なり。俳諧問答なる書に許六の自得発明弁といふ文あり。其初に題詠の心得を記したり。曰く、

一、師の云、発句案ずる事、諸門弟、題号の中より案じいだす。是なきものなり。余所より尋來ればさて沢山成事なりと云り。予が云、我あら野、猿蓑にて此事を見出したり。予が案じ様、たとへば題を箱に入て其箱の上にあがりて箱をふまへ立あがつて乾坤を尋るといへり云々。

と。蓋し是れ題詠の秘訣なり。

これによつて、この段階において、子規が蕉門許六の『俳諧問答』に目を通していたことが確認し得る。そこで、子規の蔵書目録を検索すると、子規が、寛政十二年（一八〇〇）、袴屋久左衛門等版の『俳諧問答』（全五冊）を架蔵していたことを知り得る。『俳諧問答』が、大野洒竹の校訂で俳諧文庫の一冊としての『許六集』（博文館）の中に活字化されて収められたのは、子規生前の明治三十一年（一八九八）四月のことであるが、『俳諧大要』執筆時（明治二十八年）には、子規は、直接版本によつて引用しているのであり、子規の博覧ぶりの一端が窺知得て興味深い。

子規は、許六の『俳諧問答』（自得発明弁）の一節を

「題詠の心得」を語つたものとして理解している。許六の言「題号」「題」に注目しての理解であろう。この場合の「題号」あるいは「題」は、明治三十六年（一九〇三）六月、秋声会の俳人森無黄によつて、やや唐突に用いられたはじめた「季題」なる言葉と一般であると考えておいてよいと思われる（俳誌「卯杖」第六号）。今日言うところの季語である。芭蕉の時代には、「季の言葉」と言つていたが、許六の「字陀法師」（元禄十五年刊）の中に見える「題に豎横の差別有べし」との記述における「題」は、明らかに無黄言うところの「季題」と一般であるからである（「豎題」「横題」については、拙著『俳句実践講義』岩波書店、二〇〇三年四月刊、を参照されたい）。

ただし、子規の右の引用部分の記述からでも明らかのように、許六は、必ずしも「題詠の心得」を論じているわけではない。許六は、「発句」の「案」じ方についての芭蕉の言を紹介しているのである。そのことは、子規も十分に承知していたと思われるが、右の一条、『俳諧大要』においては、「俳句をものするには、空想に倚ると、写実に倚るとの二種あり」とする流れの中にあつての論述だった、ということによるのである。つまり、子規にあつては、「題詠」は「空想に倚る」句作りの範疇に入るものだったのである。一般的に、子規は、「写実」重視の俳人と考えられているが、子規自身は「空想と写実と合

同して、一種非空非実の大文学を製出せざるべからず。空想に偏僻し、写実に拘泥する者は、固より其至る者に非るなり」との結論を示している。

ところで、子規が引用している許六の『俳諧問答』は、元禄十一年（一六九八）に成立した俳論書であり、「贈晋氏其角書」「贈落柿舎去来書」「答許子問難弁」「再呈落柿舎先生」「俳諧自讃之論」「自得発明弁」「同門評判」から成り立っている。今日においては、許六自筆本（「再呈落柿舎去来先生」「俳諧自讃之論」、あるいは自筆本からの模写本（「答許子問難弁」「自得発明弁」「同門評判」）が発見され、伝存している。が、子規が繙いたのは、寛政十二年（一八〇〇）刊の版本であるので、私も寛政十二年（一八〇〇）の版本を底本としている大野洒竹校訂の『許六集』所収のものによつて考察を進めることにする。私が注目するのは、子規が引用している箇所が続いて、許六が、左のごとき芭蕉の言葉を掲出している点である。子規も、当然、この箇所を披見していたであろう。

師の云く、発句は畢竟取合せ物と思ひ侍るべし。二ツ取合せてよし。とりあはすを上手と云也といへり。  
難有教也。

すなわち、先の子規の引用箇所は、「発句」の「案」じ方の一つとしての「取合せ」についての芭蕉の見解であり、それを踏まえての許六の具体的な方法を述べたもの

であつたのである。子規は、それを、便宜的に、「空想に倚る」句作りの範疇に入る「題詠」論に援用したということだつたのである。

子規が、芭蕉あるいは許六の「取合せ」論に注目してゐたと思われる証左としては、『俳諧大要』中の「第五修学第一期」に左の一条を見出だすことができる。

時鳥鳴くや尊菜の薄加減 暁台

（前略）時鳥と尊菜との関係は如何と云に、関係と云程のもの無く、只時候の取り合せと見て可なり。必ずしも尊菜を喰ひ居る時に時鳥の啼き過ぎたる者とするにも及ばず。只尊菜の薄加減に出来し時と、時鳥のなく時と略々同じ時候なるを以て、此二物により時候を現はしたるなり。しかも二物とも夏にして、時鳥の音の清らなる、尊菜の味の澹泊なる処、能く夏の始の清涼なる候を想像せしむるに足る。此等の句は、取り合せの巧拙によりて略々其句の品格を定む。（傍点筆者）

この一条は、『俳諧大要』において、先の「題詠」の一条より前に掲出されているが、この時点において、子規がすでに許六の『俳諧問答』を披見していたと判断してよいであろう。芭蕉や許六の「取合せ」論を踏まえて、子規による右の「取り合せ」論であることは、一読、明らかであると思われる。許六の『俳諧問答』（自得発明弁

の「取合せ」論を追つていくと、左の一条に逢着する。

木がくれて茶摘も聞やほとゝぎす

是、時鳥に茶つみ、季と季とのとり合といへども、

木がくれて、とりはやし給ふ故に、名句となれり。

ここで、許六は、芭蕉の「木がくれて」を「季と季とのとり合」と説明している。一句中の「ほとゝぎす」は、

夏の「豎題」（和歌以来の季題）、「茶摘」は、春の「横題」（俳諧の季題）。雅俗の「取合せ」である。子規は、

この一条をも披見してゐての、先の発言であらう。暁台の「時鳥」の句が、「豎題」である「時鳥」と、「横題」

である「尊菜」との雅俗の「取合せ」であることを知悉しての発言だったのである。ちなみに、暁台句、「薄加

減」と「とりはやし」ている。この例によつて、子規が、芭蕉や許六の「取合せ」論を的確に理解・消化して、自らの

ものとしていたことを確認し得るのである。

このことを確認しておいて、子規の「配合」論の実体を追いかけてみることにしたい。今繙いてゐる『俳諧大要』においては、「第六 修学第二期」に左のように記されている。

趣向の上に動く、動かぬと言ふ事あり。即ち配合する事物の調和、適応する否とを言ふなり。例へば上十二文字、又は下十二文字を得て、未だ外の五文字を得ざる時、色々に置きかへ見る可し。其置きか

へるは、即ち動くが為めなり。

ここに「動く」「動かぬ」を論じて、「配合」なる言葉が用いられている（動く」「動かぬ」については、拙著『本質論としての近世俳諧の研究』風間書房、昭和六十二年四月刊、を参照されたい）。明治二十八年（一八九五）十二月三日の発言である（新聞「日本」掲載日）。ちなみに、「動く」「動かぬ」に関しては、明治三十二年（一八九九）八月十日に「ホトトギス」第二巻第十一号に発表の「随問随答」の中に、

浅草の古き本屋や煤払 碧梧桐

此句は、所謂動く句なるべし。如何となれば、上五文字は「本町の」「京橋の」「横浜の」「品川の」等、何とでも更へ得べし。併し浅草に限るにや。

答 浅草の古本屋として名高き浅倉屋など思ひ寄せたる作なるべし。

と見える。子規の先の「配合」論を勘案すれば、碧梧桐の句は、「浅草の古き本屋」と「煤払」の「配合」ということになるうか。子規にあつて、「配合」なる用語は、時にごくごく一般的な意味合で用いられることがある。一般的な意味とは、「あれとこれとをとりあわせること。組み合わせること。混ぜ合わせること」（『日本国語大辞典』）の意である。明治三十二年（一八九九）十二月十日に「ホトトギス」第三巻第三号に発表の「随問随答」に

おいても、左のごとく用いられている。

左の句を説明せよ。

五位六位色こきまぜよ青簾 嵐雪

答（前略）嵐雪は四位五位（筆者注・『源氏物語』の「若紫の巻」に「四位五位こきまぜに」とある）を五位六位とし、これに青簾を添へ、つまり赤と漂（はなだ）と緑と三色の配合となしたり。絵は色によつて成る者、色は絵によつて現さるゝ者にして、俳句などにて色を現すは極めて難事に属す。されば古より雪と鴉の配合、鶯と鴉の配合、松杉と紅葉の配合の如き簡単なる配合はあれども、三種の色を配合したる俳句は見当らず。此点に於て、此句は珍しき句にして、且つ成功したる句なり。

ここで多用されている「配合」なる言葉は、多少俳句の成否にかかわつてはいるものの、一般的意味合に近いものと見てよいと思われる。

ところが、同じ「随問随答」中でも、左の場合などは、明らかに俳論用語としての意味合の強い「配合」なる言葉の用られ方であろう（「ホトトギス」第二巻第十号）。

「明月や湖水に浮ぶ七小町」の句の解釈を請ふ。

答 この句は、芭蕉の「月見賦」中にある句にて、琵琶湖に月を賞したる時の句なり。名月の夜、湖水に七小町が浮んで居るといふ理想の句にて、湖水の

水なるが為め、自然うかぶともいふなり。實際浮びたるにあらず、たゞ月明かなる湖上の景を見たる時の理想なり。（中略）湖水に小町を配合せしは、同月見賦中にもある如く、蘇東坡の欲把西湖比西子、淡粧濃抹兩相宜といふ詩句あるより、それに倣ひたるものなり。

この一条に、子規の「配合」論を集約的に窺うことができる。芭蕉や許六の「取合せ」論は、「題号」「題」、あるいは「季と季とのとり合（あはせ）」等の言葉に窺えたように、あくまでも季題（季語）をテーマとして、季題（季語）から発想し得るところの事物（あるいは季題）との「取合せ」であつた。ところが、子規においては、少なくとも、右の例に限つては、季題（季語）以外のところで「取合せ」（「配合」）が論じられているのである。これは大いに注目してよいように思われる。芭蕉の一句は、支考編『和漢文操』（享保十二年刊）所収の「芭蕉翁」作「月見賦」に見える句形。今日、「月見賦」は、支考の偽作とされ、この句形に対しても疑問視する研究者が多いが（別に〈名月や海にむかへば七小町〉の句形が伝わるが、作品としては〈名月や湖水に浮ぶ七小町〉の方が上質。疑問視するは、いかがか）、子規は「月見賦」も、そして、その中に見える〈名月や湖水に浮ぶ七小町〉の句も、芭蕉作として「配合」論を構築しているのである。ち

なみに、子規の蔵書目録を繙くと、子規が版本『和漢文操』を架蔵していたことが確認し得る。

もつとも、子規にあつて、芭蕉や許六の「取合せ」論と同様な用い方をしている「配合」論もある。「随問随答」と同年の明治三十二年（一八九九）一月十日に「ホトトギス」第二巻第四号に発表の評論「俳句新派の傾向」の中に左ごとく見える。

強力がうりきの清水濁して去りにけり 碧梧桐

「去りにけり」の五字にて清水を離れ、且つ自己を離れたり。即ち清水を掬もぶといふ動作の外ほかに、更に去るといふ動作を加へ、清水と人とを配合したる光景の次に、人無き清水の光景をも時間的に聯結し、以て之を複雑にし、以て陳套に陥らざるを得たり。是れ明治俳句進歩の一なり。

「清水と人とを配合したる光景」と記されているが、これは季題（季語）の「清水」と「人」（強力）との「配合」と見てよいであろう。一句の「題」は「清水」ということになる。例えば、里村紹巴の『連歌至宝抄』（天正十四年成立）には「末の夏」（陰曆六月）の項に「清水結ぶ 清水と計はかりは夏にあらず」と出ている。碧梧桐句の「清水」は、これ（清水結ぶ）に該当する（ただし、明治三十六年二月刊、高浜清編『袖珍俳句季寄せ』には、すでに「清水」単独で夏の季題として収録されて

いる）。連歌以来の「豎題」。子規は、碧梧桐句における「去りにけり」なる措辞の重要性を指摘しているわけであるが、その前提として「清水と人」との「配合」があつたのである。

右に見てきたように子規の「配合」論は、きわめて断片的である。が、実際には、子規は、しばしば「配合」なる言葉を口にしていたようであるし、門人たちも、また「配合」を子規の持論として理解していたようである。明治三十四年（一九〇一）一月十六日から七月二日にかけて新聞「日本」に連載された子規の随筆『墨汁一滴』（没後の明治三十五年十月、『子規随筆』の中に収められて公刊される）の四月十一日の条には、次の記述が見える。

虚子曰。今迄久しく写生の話も聞くし、配合といふ事も耳にせぬでは無かつたが、此頃話を聴いてゐる内に始めて配合といふ事に気が付いて、写生の味を解した様に思はれる。規曰。僕は何年か茶漬を廃してゐるので、茶漬に香の物といふ配合を忘れてゐた。

この記述だけでも、子規が「写生」同様、「配合」をも熱心に説いていたことを窺知し得る。まず、虚子の言から注目してみる。「配合といふ事に気が付いて、写生の味を解した様に思はれる」との言葉より、虚子にあつて「写生」と「配合」が、決して相容れないものではなく、「配合」の理解が「写生」の理解に繋がっていたことを

知り得るのである。そして、虚子のこの言を紹介している子規も、そのことを首肯していたのである（子規は、

明治三十年（一八九七）二月発行の「ほととぎす」第二号に載せた「俳諧反故籠」において、「実景を詠ずる場合」、

「不規則に配合せられたる玉を規則的に配合するは、俳人の手柄なり」と述べ、「写生」と「配合」との関係を明らかにしている）。子規の「茶漬に香の物といふ配合」なる言は、虚子のあまりにも真面目な発言を少しばかり茶化した、子規一流のユーモアではあるが、虚子の言を否定しているわけではない（この言葉によつて、子規の「配合」なる俳論用語が、日常語としての「配合」を援用したものであることを確認し得る）。子規は、すでに見たように、芭蕉や許六の「取合せ」論を「写実」に対するところの空想に倚る（よ）句作りの方法論として理解していたと思われるが、自らが唱えた「配合」論は、「写実」（「写生」）の論とも矛盾するものでなかったものであり、そこに子規の「配合」論の独自性を見てよいように思われる。

子規グループの人々は、子規を中心にして、明治三十一年（一八九八）一月より、明治三十六年（一九〇三）四月まで、六十二回にわたつて『蕪村句集』（几董編、天明四年刊）の輪講を試み、「ホトトギス」に連載、子規生前に、俳書堂より単行本化して出版している（全四冊、

秋の部のみ没後刊）。その中で、明治三十四年（一九〇

一）四月二十日に行なわれた夏之部の輪講中の、蕪村句、

さみだれや大河を前に家二軒

に対する虚子の左の発言も、大いに注目してよいであろう。引用が少々長くなるが、「配合」を考える上では、欠かせないものと思われる。先に子規が「墨汁一滴」中に引用していた虚子の発言よりも前の時期のものであることには留意しておいたほうがいいかもしれない。

蕪村は、冷やかな純客観の写生に甘んぜず、やゝ熱してやゝ主観を加へて此句に活動を与へて居る。従て調子の強い、引きしまつた、勢力がうちに充実してゐるやうな句に感ぜられるのである。独り此句のみならず蕪村の句の多くは此種の主観の加味してゐるのが多い。此種の主観を交へてある句は必ず調子がひきしまつて何だか其句が一種の高朗な音を発しつつあるが如くに感ぜられる。子規氏の所謂配合に対して予の音調といふやつには此種の者も亦含まれてゐる。それが為め四方太氏が蕪村の句を讀で、無形なものとの配合、極大きなものとの配合、極小さなものとの配合、何でも配合が奇抜で人を翻弄するやうな句でなければ云々（ほととぎす四巻第八号俳話参照）と驚いてゐる間に、予は蕪村の句が如何に巧みに主観を按排し、如何に其勢力の強大に、

如何に其音調の高朗なるかを驚嘆してゐたのである。

(傍点筆者)

虚子は「子規氏の所謂配合」と言っている。虚子の中で、「配合」論は、子規の持論としてはつきりと意識されていたということであり、それは一人虚子のみならず、子規門の人々の一致した理解であつたと思われる。それゆえ、右の虚子の発言中に見えるように、四方太などは「配合」論に夢中になつていたのである。対して、虚子は、主観を加味しての「音調」論を主張しているのである。この点については子規もつとに気が付いており、明治三十年（一八九七）十一月二十二日発行の「日本附録週報」中の「俳人蕪村拾遺」(後、明治三十二年十二月刊の単行本『俳人蕪村』の中に収録)において、

蕪村の句は、堅くしまりて揺かぬが其特色なり。故に無形の語少く、有形の語多し。簡勁の語多く、冗漫の語少し。然るに彼に一つの癖ありて、或る形容詞に限り長きを厭はず屢々之を句尾に置く。

と述べ、蕪村の「つゝ咲て石うつしたる嬉しさよ」の句に対して「普通に嬉しと思ふ時、嬉しといはず、俳句は無味になりらん。況して嬉しさよと長く言はんは猶更の事なり。嬉しさよといはねば感情を現す能はざる時のみ用ゐたる蕪村の句は、固より此語を無雑作に置きたるにあらず」との解説を加えている。子規も、蕪村句

の「主観」を認めているのである。ただし、子規においては、作品中の形容詞に注目しての右のごとき見解であつた。虚子にあつては「さみだれや大河を前に家二軒」の蕪村句に「主観」を見ようというわけであるから、同じく蕪村句に「主観」性を指摘しているものでありながらも、一緒に論じないほうがよいのかもしれない。が、参考までに。

右の虚子の見解にあつては、子規の「配合」論とやや距離を置くかのごとき印象を受ける。確かに、虚子は、あらゆる事項を「配合」で片付けることに對しては、疑義を有していたようである。明治三十五年（一九〇二）三月二十日の秋之部の輪講で、蕪村の、

白露や茨の刺にひとつづゝ

の句を、

茨の刺に一つづゝ露のたまつてゐるやうな光景は實際よく見るところで、予は此句を見てとげくした者にやさしいものを配合といふ理屈的の感じより、繊細な美しい景色がはつきり描かれてゐる愉快な感じの方が先づ起る。

と評しているところにも、そのことが窺われる。「配合」にこだわることによつて、作品を味読する姿勢が損なわれることを危惧しているのである。この点は、右の「さみだれや大河を前に家二軒」に對する発言とも一致していると見てよいであろう。ただし、虚子が、常に「配合」



論に対して拒否反応を示していたのかというと、決してそうではなく、明治三十四年（一九〇一）六月二十二日に行なわれた夏之部の輪講では、蕪村の、

夕顔の花囀ハナノネ猫や餘所ヨリころ

の句に対しては、

一方に牡丹と唐獅子とか蘭菊に狐とかいふものを置いて見ると、夕顔と猫との配合が殊に面白く感ぜられる。

との見解を示しているのである。蕪村句を離れての、俳人としての虚子の「配合」への究極の姿勢は、子規が『墨汁一滴』に記録していた虚子の言葉「配合といふ事に気が付いて、写生の味を解した様に思はれる」に尽きているであろう。この言葉と時期を同じくしての明治三十四年（一九〇一）四月二十日発行の「ホトトギス」第四巻第七号において、虚子は「配合」を論じて、

余は今迄、陳腐な材料でもいひ現はしやうで斬新にもなるし、平凡な配合でも調子によつていき／＼とした句になると斯う思つてゐたのだが、子規君の極端な配合論を聞いて更に一方面を開き得た様に覺える。子規君の話を、自分の説はあまり傾き過ぎてゐるかも知らぬが、併し今日は此説を主張する必要があると思ふ云々。然り、配合論は誠に時弊にあつてゐる説だ。今の俳句に志す人、孰れもよく配合に注意し

て、早く其單調無趣味の境を脱せられたいものだ。と語っていることによつても、そのことを確認し得る。この発言は、虚子が、子規によつて自らの句を「陳腐」と評され、かつ、その「陳腐」は「材料の配合が陳腐」だからであると指摘されたことがきっかけとなつてのものである。虚子は、子規の「一喝」によつて大いに悟つたようである。

子規の『墨汁一滴』の記述により、やや虚子の発言にこたわり過ぎた感がある。子規の断片的な「配合」論を整理、発展させたのは、実は、虚子ではない。佐藤紅緑と河東碧梧桐である。

まず、紅緑から見ていくことにする。その論が見えるのは、子規生前の明治三十五年（一九〇二）六月に出版されている著作『俳句修辭法』（新声社）において。「配合の事」に一章を当て、詳細、かつ体系的に論じている。紅緑の「配合」論は、「事物の配合」論であり、

物と物との配合は、最も容易にして最も困難なるものである。何をか容易といふ、何でも配合する事が出来るからである。何をか困難といふ、配合多くは適切にならぬからである。配合の不調和は、俳句の不調和で、所謂鶴的いはゆるつるえの俳句は、此から起因するのである。

と書きはじめられる。そして、

凡て或る物に或る物を配合するには、両者最も親しき關係を持て居るものにあらざれば、一面に於て全く無關係にして、一面に於て細く僅かに一道の脉が通ふて居るものでなければならぬ。

と論を進め、具体例を示しているが、具体例についての紅緑の見解は省略する。次に、紅緑は、「配合」の方法にと論を進め、左のごとく記している。

然らば、配合するにはどうしたらよろしいか。曰く、趣味を知る事である。趣味とは趣である。其物の趣きである。(中略) 趣とは、其物の性質である、特色である。

そして、

其の物の特色に従つて之に調和する配合をなすこと之を古人は、動く、動かぬといふ。

とまとめている。ここにおいて想起されるのが、すでに見たところの『俳諧大要』における子規の「配合」論である。そこにおいて子規は「趣向の上に動く、動かぬと言ふ事あり。即ち配合する事物の調和、適応すると否とを言ふなり」と述べていた。紅緑の「配合」論は、大変わかりやすく整理、論述されていて、我々には貴重な「配合」論であるが、つまるところは、子規の「配合」論の祖述ということに止まつてゐる感があるのは否めないであらう。

なお、「配合」論にまでは論が及んでいないが、「配合」と「動く」「動かぬ」との關係を指摘しているものに(これも子規の論に倣つたのであらうが)、内藤鳴雪の著作『俳句作法』(博文館、明治四十二年三月刊)中の「動と不動と」の章がある。次のように記されていて、子規や紅緑の論を補強してくれる。

俳句の著想の上に動く、動かぬといふことが常にいはれる。これは事物の配合の上のことで、例へば、或る季の事物に他の事物を加へて、それで一つの景色を詠じたとする。そこで其の加へた事物が季の事物といかなる調和を保つかと調べて、最も調和されたのが、即ち動かぬので、左程調和されぬのが即ち動くのである。

鳴雪は、「季の事物」と「他の事物」の「配合」によつて「動く」「動かぬ」を説明しているが、俳句という文芸においては、多くの場合、「季の事物」と「他の事物」の「配合」ということになる。

碧梧桐の「配合」論に目を通して、蕪難な小稿を閉じることにする。碧梧桐の「配合」論を見ることが出来るのは、子規没後三ヶ月目の明治三十五年(一九〇二)十二月に出版されている『俳句初歩』(新声社)の中である。独立して「配合論」の章が設けられている。次のように書きはじめられる。

一句を形づくる場合に於て、二つ以上の事物を風詠することがある。其事物のあるものに對する、他のものを其配合といふのである。詞を換へて言へば、あるものゝ美的趣味を助くる爲めに、他のものを添へるのである。(中略) つゞまるところ、配合は、一句を賑はすものである。複雑ならしめるものである。平板單純を避けしむるものである。

碧梧桐の「配合」論は、子規や紅緑や鳴雪の「配合」論と異なり、「動く」「動かぬ」の論に收斂されないので、やや趣を異にしている。一言で言えば、俳句作品の「平板單純を避けしむるもの」としての「配合」である。その点では、子規の「配合」論を援用しつつも、紅緑の「配合」論にない独自性を獲得し得ているといえる。「配合」論の前提として、碧梧桐は、次のごとき事實を指摘する。

凡そ吾等の風詠せんとする世上の事物は、多く複雑なものである。目で見、耳で聞くものに、たゞ一物一事の外何物をも見聞しないといふやうな場合は甚だ稀である。だから其見聞を根本にして居る詩文も亦た左程單純なものではない。よし俳句の如き短詩形のものでも、元來の見聞が複雑であるから、其取材の範圍の相違ない限りは、矢張多少複雑なものである。故に始めからかゝる配合を求めやうと特に注意しないでも、大抵の句が自然に配合を要求して、

作者の注意しない間に配合の美的約束を踏んで居るやうなことがある。配合とて、何もむづかしいことではない。

これが、碧梧桐の「配合」論の前提である。子規や紅緑は、「配合」ということに対して、かなり意識的であつたが、碧梧桐の場合、「配合」は、「世上」を「見聞」することによつて自然に齎されるものであるとするのである。「句が自然に配合を要求する」ともいつてゐる。ただし、この樂觀的ともいえる「配合」論に、「配合の妙否は、又た別問題である」と述べて、齒止めをかけることも忘れていない。碧梧桐によれば、「配合」とは、蕪村の句(二本の梅に遅速を愛すかな)のごとき「無配合」に對する「有配合」を指す、ということになる。そして、碧梧桐は、その「有配合」を三つに区分している。すなわち「反對趣味の配合」「同趣味の配合」「異趣味の配合」の三つである。ここに碧梧桐の「配合」論のユニークさを認めてよいであらう。

碧梧桐は、まず、「反對趣味の配合」に對して、

予が實際の経験に於ても、始め兎角この反對の配合を喜んで作り、且つ古句を読んでも、前例の如き(筆者注・碧梧桐は、蕪村の「いばりせし蒲団干したり須磨の里」等、全四例を示している)以外に何でも反對の配合の句を賞美して居た。が、今日から見ると、

それは悉く理屈的の配合であつた。反対のもので趣味的配合を求めやうとするのは、容易のことでないといふことを悟つたのである。

この見解を示している。碧梧桐の、やや樂觀的とも思える「配合」論も、「趣味的配合」を希求するに至つて、子規や紅緑の「配合」論と、その距離をぐつと縮めた感がある。碧梧桐も、また、間違いなく子規のよき理解者の一人だつたのである。続けて、「同趣味の配合」に対しては、蕪村の（閻王の口や牡丹を吐んとす）等、全五句の俳句を示した後で、

同趣味の配合は、ある物に他のものを添へて、其趣味を助けしむるのである。一で足らぬところへ、今一を加へて二とするのである。即ち、錦上花を添へる手段である。古今の句中、配合の尤も普通なるものは、この同趣味の配合であつて、又た尤も配合の当を得易い手段でないかと思はれる。

と述べ、「この同趣味の配合の快味を悟るのは、纏て俳句研究の一步を進めたものだと言ふてよいのである」と加えている。そして、三つ目の「異趣味の配合」に対しては、前の二つの「配合」を見据えつつ、蕪村の（火花せよ淀の御茶屋の夕月夜）、他全八句を示した後で、

反対の配合といひ、同趣味の配合といひ、要するに配合らしい配合である。配合致しますと断つて置く

やうなもので、何処にか坊主の坊主臭いところがある。が、其臭味を脱却する配合は、即ち異趣味の配合である。（中略）譬へば、鼠色ににぶ色を配した如きものである。必ずしもはつきりした配合が單純で、どんよりした配合が複雑であるといふ所以はないけれども、多くの場合に於て、趣味の発達しない人は顯著な配合を喜び、多少進歩した者は、不顯著な部分を嗜むといふ区別はあると思ふ。

この見解を示して、まとめとしている。先に紅緑が「或る物に或る物を配合するには、両者最も親しき關係を持て居るものにあらざれば、一面に於て全く無關係にして、一面に於て細く僅かに一道の脉が通ふて居るものでなければならぬ」と語つていた「配合」を、碧梧桐は、一歩進めて三分類として示してくれたのであつた。一つの試論ではあるが、教えられるところ少なくない。

碧梧桐は、「配合論」の章を閉じるに當つて、「古人はこの配合を「取合せ」といふて居た」として、許六の「取合せ」論を紹介して、章を結んでいる。芭蕉や許六の「取合せ」と、子規の持論である「配合」論とは、必ずしも同一のものでないことは、すでに検討を加えたところで、いくぶんかは明らかにし得たと思われるが、私が、小稿を、子規に導かれつつも、許六の「取合せ」論から入つていつたことも、また、故ないことではなかつたのである。